

## シティズンシップの変容を再考する——アジアとヨーロッパの視点から——

高原幸子（中京大学）

生地図と NGO の公共領域——家事従事者とシティズンシップ

平石耕（成蹊大学）

現代英国におけるシティズンシップ論の諸相

——B.クリックの「能動的シティズンシップ」論の文脈

討論者：加藤敦典（東京大学、非会員）

世話人（司会・討論者兼務）：井上弘貴（神戸大学）

シティズンシップにかんする理論的考察の進展には近年著しいものがある。今年度に限ってみても本学会の会員を中心とした研究成果として、たとえば木前利秋、時安邦治、亀山俊朗編『変容するシティズンシップ——境界をめぐる政治』（白澤社、2011年）などを挙げるができるだろう。ただし、シティズンシップ研究がそのように興隆をみせる一方で、社会学、文化人類学、政治理論、移民研究といったさまざまなディシプリンにおいて得られた知見の蓄積を相互に検討しあう機会はあまり多くないように思われる。

そこで、本セッションではベトナムの村落地域の婦人会が作りだす親密な公共圏についての研究を進めている加藤敦典氏（東京大学 東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ特任助教）を討論者に迎え、アイワ・オング『アジア、例外としての新自由主義——市民権と主権の変容』（作品社近刊予定）の翻訳作業を加藤氏とともに進めるとともに、アジア地域における女性たちとエンパワーメントの問題についてフィールドワークをおこなってきた高原幸子会員と、バーナード・クリックらの議論に依拠しつつイギリスにおけるアクティヴ・シティズンシップ論について政治理論的考察を深めてきた平石耕会員が、それぞれのフィールドとスタンスから、シティズンシップの変容についてあらためて何が問われているのかについて報告をおこなった。

高原報告は、東南アジアの著しい経済成長のなかで、介護福祉や家事労働、さらには性産業にかかわっている多くの女性出稼ぎ労働者たちが、受け入れ国の社会に労働力として包摂されつつも、政治的権利はおろか、しばしば最低限の市民的権利をも暴力的に剥奪され、公共空間からその存在を抹消されている現状に前述のオングの著作に依拠しつつ触れることで、ネオリベラルな市場の要請による移民労働力の選択的な包摂と排除のメカニズムについて光をあてた。高原会員がオングを踏まえて主張したことは、移民労働力は受け入れ国におけるその有用性の程度に応じてシティズンシップを選択的に割り振られているということである。

それにくわえて高原報告は、おなじくオングの議論を踏まえつつ、外国人労働者たち、とりわけ家事労働に従事する出稼ぎ女性労働者たちをサポートしているさまざまな NGO 団体に焦点を当て、これらの NGO が「エンパワーメント」という名において実際には女性たちを効率的かつ適切な労働主体として規律化するという、ネオリベラルな市場の要請を積極的に下支えする役割

を演じてしまっていることを指摘した。すなわち、NGOが女性たちにたいして性暴力をはじめとする受け入れ国におけるさまざまな危険から身を守るための知識や振る舞い方を啓発的に教育することによって、彼女たちは適切な性道徳を身につけ、市場の観点からも「有用」である行動を自主的にとれるようになる。しかし、まさにその点においてNGOは一種の統治の機関として逆説的に立ちあらわれてしまう。NGOはその意図がどのようなものであれ「メイドたちの生物学的存在を政治空間に関係づけ、剥き出しの生に価値を与えている」のである。それゆえに、東南アジアにおける外国人メイドのためのNGOの諸々の活動は、皮肉にも彼女たちの道徳的存在としての正当化と市場アクセスの増大に貢献してしまっていることを高原報告はオングに即して指摘した。

以上を踏まえたうえで、高原会員は、しかしながらNGOの活動にはたしかにオングが指摘するような側面があるとはいえ、その活動はもっと両義的な可能性を含みこんでいるのではないか、すなわち、出稼ぎ女性労働者たちを啓蒙的に規律するという役割をしばしば果たしつつも、彼女たちが公共空間にその姿をあらわし自分たちの置かれている状況に異議を申し立て、権力関係を変容させるための機会や技法をも提供しうるのではないのか、ということの問題提起というかたちで示唆した。高原会員によれば、オングの議論はジェンダー構造やセクシュアリティの体制を労働と結びつけ、性規範を操作される仕事に従事することがもたらす人格への影響を考慮していない。それゆえに、市場に適合的で周辺地域のモラルエコノミーに誘引される自由な経済主体というネオリベラリズムの一義的な定義に抗して生の営みを捉えることで、労働規律および身体規律への対抗の可能性をNGOの活動のなかに見出す方向性が展望された。

平石報告は、ブレア政権下でシティズンシップ教育に関する諮問委員会の座長を務めたことでも知られ、「能動的シティズンシップ」を提起したバーナード・クリックの議論を、(1) マーシャルの社会的シティズンシップ＝社会権の理念を再定式化するR.プラントや、共同体の紐帯を強化し相互責任の感覚を涵養する能動的シティズンシップを説くD.マーカンドといった中道左派のシティズンシップ論、(2) 「道徳的に責任ある市民」を提起するD.G.グリーンのような保守派からのシティズンシップ論、(3) 多文化主義に立脚したパレーク報告にみられるシティズンシップ論の三者と比較対照させることによって、その固有の位置づけを明らかにするものであった。

平石会員によれば、クリックの議論はマーカンドやグリーンよりもパレーク報告と共通した特徴をみせている。すなわち、政治の本質を「創造的妥協」に求めたクリックは、多様なアイデンティティを背負う個々人の平等な価値を認め、その実現を阻害する経済的社会的不平等の構造を批判した。そのうえでクリックは、現代英国においてアイデンティティの重層性ないしは変化を認め、ナショナリズムとパトリオティズム、イングリッシュネスとブリティッシュネス、同化と統合とを区別し、ブリティッシュネスと結びつけられたパトリオティズムの対象を、議会、国王、法という共通の制度に限定すべきだと主張したことが明らかにされた。

ただし平石会員は、多文化主義のシティズンシップ論が、少数派の側から承認を求めて提示されるのにたいして、クリックの場合は現代資本主義が生み出した消費社会にたいする批判が根底にあることを指摘した。クリックが問題視するのは、イングランド人が、自らの民族性に無自覚なままイングランド人たることと英国人たることを同一視してしまう傾向とともに、消費社会

において多数派を形成する新しい中産階級が、目先の私生活への退却と物質主義的な消費者的自我を露わにして、他者を配慮することに一切関心を持たないような状況である。

こうしたクリックの批判から浮かび上がってくるのは、平石会員によれば、社会の多様性に注意を払い、他者の苦悩に耳を傾けて協同して自ら社会のルールを点検し改変しなければ自由は保障されないというクリックの理解であった。この意味においてクリックは、「公民的共和主義の伝統はつねに権利と義務とを相互的にみる」と指摘した。それゆえにクリックの説くシティズンシップ論で要請される「能動性」は、社会のあり方そのものに批判的であることを求め、「他者の権利を守るために協同する」ことを意味しているのであり、同じくシティズンシップにおける能動性を要請しつつも、「発展国家」としての成功のためにそれを求めるマーカンド、あるいは「寛容社会」に歯止めをかけるためにそれを掲げるグリーンとは決定的に異なることが浮き彫りにされた。

以上の両者の報告を受け、前述の加藤氏と司会の井上会員よりコメントがなされた。この事後報告においては、質疑応答のなかでとくに議論の中心を占めた「シティズンシップのグラデーション化」というオングの指摘を、当日のセッションをお聞きいただけなかった方にもくわしくご紹介したいと考え、加藤氏に若干の事後的な捕捉を加えていただくかたちで以下のまとめをいただいた。

高原氏へのコメントというよりは、高原氏の議論の背景にあるアイワ・オングの議論の大枠を紹介し、議論の補助線を引いてみたい。

オングの議論の背景には、アジアの新興国におけるナショナリズムの衰退という状況がある。アジアの新興諸国は、国民国家を作るために、長いあいだ開発・福祉国家をめざす方向で発展してきた。しかし、実際には、それらがつくりだされる前に、グローバルな新自由主義経済の展開に巻き込まれ、そのなかでの生き残りをかけて、国民国家的な領域の切り売りをしなければならなくなった。とくに、高原氏の議論との関連でいえば、アジア諸国において、シティズンシップのグラデーション化が起きているというオングの指摘が重要である。私なりにまとめれば、それは、シティズンシップの三層化といえるような現象である。

三つの同心円をイメージしてもらいたい。いちばん中心には、いわばコア市民たちがいる。彼らは必ずしもその国家の国籍をもった住民ではないかもしれない。彼らは移動するエリートたちで、新自由主義的な行動・思考様式を体現している。選挙権こそ付与されないものの、国家から最大限の市民的特権を享受している。その外側には、「非市民」たちがいる。彼らの多くは移民労働者である。彼らはおもに経済特区のなかに囲い込まれている。そこで働くことは一定の生存の機会を提供する。しかし、市民的法秩序から例外化された状況のなかで、労働権などをいちじるしく制限されている。

さらにその外部には、「非市民」たちを供給する周辺世界がある。この第三の同心円はオングの議論には登場しない。もともと、第二の同心円と第三の同心円の境界線は国境線に重なっていた。しかし、近年のアジア諸国では、国境をまたいだ経済特区も登場しており、境界線はかならずしも国境とは一致しなくなっている。オングの議論で興味深いのは、第二の同心円において、

「剥き出しの生」に対する管理がおこなわれているのと同時に、周辺世界における「伝統」的な価値観を使ったより温情的な管理がおこなわれているということである。

この加藤氏によって提起されたシティズンシップの三層化という枠組みを踏まえ、中山智香子会員からは、第二層と第三層の境界はどのように引かれるのかという質問がとくに高原会員にたいしてなされ、高原会員は受け入れ国の法的保護の網の目にかかるかどうかという点が重要であることを指摘した。また、平石会員もこの三層化の提起を受け、クリックも、第二層から第一層への移民の話は注意しているとの補足をおこなった。

そのほかに時安邦治会員からは、とくに平石報告にたいしてデイヴィッド・ミラーとクリックとの異同について質問があり、平石会員は両者の関係についての考察は検討中であると前置きしたうえで、両者はかなり共通の特徴があるが、ミラーの場合はまずナショナリティありきで、「他者の権利を守るために協同するときのみ、われわれは市民として行動している」というクリックの立場ほど個人の要素が明確ではないのではないかと応答した。

鵜飼哲会員からは、高原会員にたいしてイギリスの植民地統治文化の影響にかんする質問も投げかけられ、メイドの歴史的实践にはたしかに植民地文化の影響があるとともに、華僑系人口のなかで近代的フェミニズムの立場によるその克服運動が、啓蒙主義的な観点からなされてきたことを高原会員は指摘した。また、鵜飼会員からは日本における移住女性をめぐる人身売買の状況や農村花嫁の実態にかんする指摘も震災と関連させてコメントがなされた。それにたいして高原会員は、女性のセクシュアリティが市民権と結びつく際の結婚制度の存在の大きさについて応答がなされた。また、それ以外にもフロアからは平石報告は国民国家を前提としたシティズンシップにかんする議論であるのにたいして、高原報告は越境的な NGO をベースにしたシティズンシップにかんする議論かとの指摘があったが、平石会員からは、クリックも NGO など市民社会の要素は重視しているという応答があった。

本セッションは副題をアジアとヨーロッパの視点からとしたが、これら地域を実体視するものではなく、グローバリゼーションのもとでひとの国際的移動がこれまでになく加速している現在、なお国民国家を媒介としつつシティズンシップが果たしてしまっている選別的な効果と、その効果を自覚しつつもシティズンシップそれ自体をより開かれたものにしていくための構想とを、理論化するひとつの試みであった。初日の早朝という時間帯にもかかわらず延べ27人の方に参加をいただいた。この場を借りてあらためて、参加いただいたすべての方がたに御礼を申し上げます。

(文責 井上弘貴)